



## 延命寺の文化財

一志町井関、波瀬川の近くにある延命寺。その創設は、かつてこの地域を支配した北畠氏が行ったとされていますが、定かな記録はありません。「一志町史」によると、この寺に安置されている津市指定文化財の木造薬師如来坐像は、北畠氏滅亡後に多気からこの地に移され、これを祭るために常楽寺という寺院が建設されたといわれています。その後、江戸時代の安政4(1857)年に、常楽寺と隣にあった延命寺が合併し、天福山延命寺となり、現在に至ります。

延命寺境内には、本堂の左手に薬師堂があり、ここに木造薬師如来坐像が安置されています。像高は108.4cmで、量感豊かな体躯に奥行きのある頭部を表し、後世の修理が全体に及んではいるものの、頭部から両肩、左腕などは平安時代の特徴を色濃く残しています。

そして、その薬師堂の前には、三重県指定文化財の石棺があります。この石棺は、200年ほど前に近隣の民家の敷地から掘り出され、延命寺境内に運び込まれたと伝えられています。石棺の全長は約210cm、幅約100cm、高さ約45cmで、蓋は屋根形、棺身は箱形となっていて、家形石棺の部類にあたります。

蓋・棺身ともに、地元で産出する砂岩の井関



木造薬師如来坐像



延命寺の石棺

石をくり抜いて成形されており、井関石は加工しやすいことから、古くから周辺の常夜灯や民家の土台などに利用されていました。このほか境内には、石碑の台座に転用した同様の石棺の蓋があることから、複数の石棺があったと考えられています。

古墳時代にこのような石棺に葬られた人物は、この地域を治めていた者であったと考えられます。三重県内で、このようなくり抜き型の家形石棺が現存する例は少なく、一志地域の歴史を物語る貴重な資料といえます。

